

## ベンガル詩人にとってのタゴール

丹羽京子

2001年度第4回 FINDAS 研究会 : 〈現代(いま)、タゴールを読む〉 : 2011/7/9

## 1. タゴールを読むということ

・ベンガル人にとってのタゴールと、非ベンガル人にとってのタゴール

「ジボナノンドが、タゴールが亡くなった際にこのように述べています。『イギリスの詩人たちがシェークスピアを源泉とし、時代を重ねるうちに発展しつつも結局は彼を中心として巡っているように、ベンガルの詩人たちがタゴールの周りを回り続けるかどうかは、今後検証されるべき事柄ではあるけれども、わたしには根拠のない見当外れの予測ではないように思える』タゴール後の今一人の偉大なベンガル詩人、ブッドデブ・ボシュも同様なことを語っています。『未来の詩人が、タゴールを読んだこともなく、あるいは読んでも好きになれないということは考えられないことではないかもしれないが、それでもその詩人がベンガル詩を書いている限り、それはタゴールが存在したからこそであることに変わりはない。』この発言はタゴールの尽きることのない求心性について言及したのですが、そのこと自体はおそらくベンガル文学にのみあてはまることでしょう。」

「過去百五十年の間に、タゴールのように世界に認知された文学者のごくわずかです。「世界詩人」という彼の称号は、彼に先立つゲーテに劣るものではありません。そしてまた、過去百五十年で、彼ほどインドに—多くの流れが束になった文明としてのインドであり、国家としてではなく、社会として存在してきたインドのことですが—認知された詩人もいません。そして同時に過去百五十年で彼ほどベンガル語に広くそして決定的な影響を与えた詩人もいないのです。ただしわたしたちはこの順番を入れ替えて、ベンガル、インド、世界の順でタゴールを捉えようとしめない限り、彼を見失ってしまうでしょう。彼はベンガル人であり、インド人であり、そして世界市民なのです。しかしまた同時に、わたしたちはこれらのうちのどれかに彼を限定してしまっても彼を見失ってしまうことになりません。タゴールは矛盾することなくこの三者であったからです。」

Amiya Dev, *Tagore as World Literature*,

CLAI (Comparative Literature Association of India) conference at Gandhinagar in 2011

文中の引用は各々以下の通り

Jibanananda Das, 'Rabindranath o Adhunik Bangla Kabita', *Kabitar Katha*.Buddhadeva Bose, 'Bangla Kabitar Svapnabhanga', *Sanga:Nihsangata/Rabindranath*

## 2. 30年代の詩人〜ブッドデブ・ボシュの場合

「タゴールとそののちの詩人たち」Rabindranath o Uttarsadhak, 1952 より

「彼ら(タゴール直後の世代)にとってタゴールを模倣することは不可避であり、そしてタゴールを模倣することは不可能だった。」

「(コッロール時代のタゴール批判は)リアリティの厚みがない、人生の燃えるような苦悩のしるしがない、そしてその人生観において人間の不可侵の肉体というものを不当なほどに無視している、というものであった。この反逆には行きすぎもあったことは疑いない。…しかしこの反逆は必要であった。ベンガル詩の解放のために、そして真にタゴールを自分のものとするために。ここで言うっておかなければならないのは、こうした(反タゴールの)運動に熱心だったものたちは、タゴールに最も心酔していたものたちでもあったということである。事実、夜は寝転がって『プロビ』(1925)を読み、昼になるとタゴール攻撃の文を書いていたものをわたしは少なくともひとり知っている。」

「そののちにやって来たもの、そしてまたさらにのちにやって来るであろうものには、タゴールに対する恐れがもはやなくなった。」

「わたしたちがタゴールを得たということは、わたしたちにとってこの上ない幸運だったけれども、この偉大な詩人を得るために、わたしたちはまたその対価を支払わなければならなかったか、あるいはまだ支払っている最中なのである。その対価とは、ベンガル語で書くということ、かれがおそろしくおぞましいことにしてしまったということである。ひとり以上のタゴールは必要ない。かれののちに詩を書くとするれば、かれがしなかったことを選びとらなければならない。」

『詩人ロビンドロナト(タゴール)』 Kabi Rabindranath, 1966 より

「タゴールには、全体として彼のあらゆる特質を表すような代表的な詩集、あるいはまた、これが頂点であると言えるような詩篇はない。けれども『ギタンジョリ』には、ほかの多くの詩集には欠けているもの、つまり調和と完璧さを見出すことができる。…タゴールのような言葉にたけた詩人にとって、(『ギタンジョリ』における)その内面に根ざした必然的とも言える抑えた表現がいかにも効果的であったかは、そののちの『渡り飛ぶ白鳥』や『プロビ』の甘くも情熱的なありようを思い起こせば、はっきりと理解することができるだろう。…『ギタンジョリ』期の作品群は、真に詩であり、韻律技法の面でも輝かしい道標となっている。すなわちこれらは詩としても自らの足で立つことができるものなのである。歌となったがために、ベンガル全土においてこれらの人気は、それに匹敵するものを持たないものとなったのではあるが。…『ギタンジョリ』のようなそれ自体完璧な作品を目にすると、われわれはこれ以上なにもつけ加えたくなくなる。」

### 3. 今日の詩人～ジョエ・ゴーシャミの場合

・タゴール没後の世代

『わたしのロビンドロナト(タゴール)』 nijer Rabindranath, 2004 より

「タゴールをいつ初めて知ったのか、今となってははっきりわからない。ベンガル人の子どもなら、教科書を通して必ずタゴールを知ることになるし、わたしも幾分かはそうして知ったのだろうけれど、思い出せる限りにおいては、字を読めるようになる前からタゴールと親しんでいたように思う。」

「亡くなる前のわたしの父が、ふたりの幼い息子といつも心配事を抱えていた妻のほかに、その歌を歌って聞かせたことがあるのかどうかわからない。人前で歌うような力があったようにも思えない。かすれたようながら声だったからだ。タゴールについてスピーチひとつしたこともなく、そうした席に呼ばれるようなこともなかった。けれども父は、タゴールを愛することを知っていた。…（父が亡くなって）穴が開いたようになった家族にはそれでも、ひとつの喜びがあった。その日々なかで、タゴールがわたしの家族の一員になったのである。わたしたちの喜びや悲しみとともに、タゴールは常にあった。」

「もう少し大きくなったころ、わたしはタゴールに対して理不尽な怒りを抱いた。そのころわたしの周りにはタゴールの信奉者が目につきはじめ、『ウパニシャッド的感觉』だの『最高神』だの『インドの魂』だのの大仰な言葉でわたしをたじろがせ、それまでわたしが持っていたタゴールとの家族的、あるいは個人的な、ある種秘密の絆をずたずたにし始めたからである。こうしたタゴール信奉者たちは、タゴールにまつわるさまざまな集まりで議長となり、賓客となり、そしてまたタゴール詩の朗読会の審査員となった。…若かったわたしは、こうしたありようを見て困惑し、理不尽なことにタゴールその人に腹を立てたのだった。当時のわたしは、タゴールを愛するためにタゴールの信奉者になる必要はないということがわかってはいなかった。」

「それらの（タゴールの）詩は今から80年前後も前に書かれたものだ。そのころのベンガル詩とはどういうものだったのだろうか？そう考えて同じころに書かれたほかの詩人のものを読みはじめ、続けて何日も詩を読みふけた。ほかの詩人の詩、タゴールの詩、というように。そのときにわたしを襲った驚きと言ったら！「黄金の舟」を書いた人物が「行く先のない旅」を書き、その同じ人物が『境』を書き、『渡り飛ぶ白鳥』を書いたのだ。その彼が『ギタンジョリ』を書き、そしてまた『火花』や『書きなぐさみ』を書き、それと同時に『追伸』や『最後のしらべ』や『木の葉の皿』を！…わたしたちのこのベンガル語世界には、タゴールの後も優れた詩人が数多くあらわれた。けれどもこれほど長きにわたって変化し続けた詩人はいない。まるで地球そのものが絶えず変化し続けて今日のこの姿になっているかのように。」

「（タゴールは）若い作家たちから称賛だけではなく、批判も受け、そうした批判が公にされると（タゴールは）傷ついたものだった。けれども今日のわたしたちはこれらの批判を通して、なおいっそうタゴールの本質を捉えることができる。…今でもタゴールに対する批判はあるし、それは良いことなのだと思う。なぜならそれによってわたしたちは2度3度と考え直すことができるのだし、こうして考え直すことによってまた新たなタゴールを発見できるからである。」

「タゴールはわたしにとっては世界詩人ではない。わたしにとってタゴールは家族の一員であり続けるだろう。しかしまた一方で、知られざる（タゴールの）神秘はますます深まっていく。この自分の内なる知られざるものがわたしのタゴールなのだ。」

**参考：**

## 雑誌類

- 「コッロル」(1923～)
- 「プロゴティ」(1928～)
- 「ポリチョエ」(1931～)
- 「コビタ」(1935～)

## タゴールの直後の世代

- ショッテンドロナト・ドット (1882-1922)
- モヒトラル・モジュムダル (1888-1952)
- カジ・ノズルル・イスラム (1899-1976)

## 30年代の詩人たち

- ジボナノンド・ダーシュ (1899～1952)
- シュディンドロナト・ドット (1901～60)
- オミヨ・チョックロボルティ (1901～86)
- ブッドデブ・ボシュ (1908～74)
- ビシュヌ・デ (1909～82)

- ジョエ・ゴーシャミ (1954～)